

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.27 2023.3.18

わたしの野良着

令和5年3月18日～5月21日



写真1 いつもの野良着 せんぜ畑でにんじんをこぐ(2022年 穂高)

安曇野では、農作業などへ出ることを、野良へ出るといい、野良仕事で着るものを野良着と呼んだ。野良着には、動きやすく、汚れても手入れがしやすく、日差しや虫から身体を守り、汗をかいても蒸れにくいなど、さまざまな機能が必要である。

かつてに比べ農業を生業とする家は減ったが、田畑を持ち、休日は農作業をするという家はまだ多い。農家でなくとも前栽畑(せんぜ・せんぜ畑)といって、自家用に畑を耕し、野菜や果物、花などを作っている人も多くいる。そういう人たちは、今でも当たり前のように野良仕事には野良着を着る。

昔はどんな野良着を着ていたのだろうか。どのように作られ、その機能性はどうだったのか。そして、現在の野良着はどうだろうか。野良着には、蓑や着莫座、ワラジやゾウリといった履物、笠などの被り物もあるが、今回は身体に着る野良着の変化から、人々の暮らしや野良着への意識がどう移り変わったのか、見ていくこととする。

1 ふだん着＝野良着の頃

明治維新後、西洋の文化が入ってきても、庶民がふだんから洋服を着るのはかなり後になってからである。多くの方は江戸時代からの生活様式のまま、着物を着て暮らしていた。着物は、晴れ着とふだん着との区別があり、おおよそ絹製品と木綿製品を着分けた。ふだん着は木綿製品でその古くなったものを野良着として着用した。当時は炊事ひとつとっても、水道やガスなどのインフラも整備されていないし、電化製品などもなかったため、焚き物の準備から始まり、水汲みや土間に据えたかまどでの煮炊きだった。ふだんの暮らしそのものが労働だったので、野良へ出る時もいちいち着替えたりせず、その格好のまま野良仕事をしていた。つまり、野良着は日常着でもあった。

野良着には、木綿が気軽に手に入る以前は麻などを用いた。木綿へと変化する時期は町部や山間部など地域によっても異なるが、豊科町や穂高有明土場の明治初年生まれの方が、棉（植物）を栽培して、収穫した綿（繊維）を綿屋にヨリコ（紡げる状態）にしてもらい、糸に紡いで機を織ったというから、江戸時代末から明治初めころには、木綿のふだん着が主流になっていたと考えられる。暖かく肌触りがよく、吸湿性の高い木綿は、ふだん着として、また野良着としても以後手放せないものとなっていく。季節に応じて夏は単衣に肩当をつけ、春秋冬は裕、寒い時は綿入れ半纏やソデナンなどを着た。

長着を野良着とする場合、裾が長いままでは足にまとわりついて邪魔になる。そのため、男性は三尺の帯を締め、裾全体を後ろで帯に挟んで尻端折りし、足にぴったりする木綿のモモヒキをはいたりした。安曇野では、女性がモモヒキをはくことは少ない。

裾全体を帯に挟み、下着の腰巻を出して仕事をした。袂も邪魔になるのでたすきを掛けてまとめた。また、何か物を運ぶ時などは、着物を汚さないために前掛けをした。前掛けは家で使うものより丈を短くした。

しかし、裾を端折ったり、たすきを掛けるだけでは、激しく動いて作業をすると裾や袂が落ちたりして邪魔になる。そこで、袖をツツソデにしたり、長着の裾を入れられる山袴（カルサン・ユキバカマ・モンペの総称）をはくなど、上衣と下衣に分かれたツーピース（二部式）の野良着を着るようになる。上衣と下衣を分けて着ることにより、野良着とふだん着との区別が生まれ、野良着は仕事着としての機能が高まっていく。



図1 女性の田植えの野良着（一例・左）
長着の裾を帯に端折って腰巻を出す。嫁入り前の娘や新婚の嫁は、赤い腰巻やたすき・手甲の紐などに赤い色を使った。年配者は晒の腰巻にした。帯は、ぼろ織の半巾帯。稲刈りなどでは前掛けをした。（右）



写真2 明治40年頃の田植え 豊科成相 菅笠を被っているのは女性。長着にたすき掛け、ユキバカマ、手甲といういでたち。左奥の男性は、カンカン帽、ツツソデの短着にモモヒキ姿。（当館蔵）

2 着物からツーピースへ 男女で異なる野良着の変化

二部式の野良着にはどんなものがあっただろうか。男女で同じものも着たが、違うものも着たし、変わっていく過程も異なるので男女別に見ていくこととする。

男性の野良着



図2 男性の野良着（一例）
明治時代末（左）手ぬぐい・短着・モモヒキ・ハバキ・ワラゾウリ・三尺帯
大正時代（右）カンカン帽・シャツ・ハッピ

男性の場合、上体には尻が隠れる程度の短い丈のジュバン・ジバン・ソデナガジュバン・シリキレバンテンと呼ぶ短着^{みじかぎ}を着た。ツツソデのものはツツポ・ツツポなどと呼んだ。短着は、裾の横に馬乗りと呼ぶスリットが入っていて動きやすくなっている。短着の下にはモモヒキやユキバカマをはいた。モモヒキとユキバカマについては後で述べる。田植えや夏の暑い時期には、ジュバンにハンモモヒキと呼ぶ^{ひざ}膝丈のモモヒキをはいた。穂高柏原では、あさぎ色木綿のハンモモヒキをはいて、紺木綿のはばきをつけた。明科宮本では、ユキバカマのひざ下を、ふくらはぎに密着させてたたみ込み、膝下と足首の二か所をわら^{しば}で縛^{しば}ってはいた。

大正時代になると、商家などで着ていたハッピや洋服（シャツ）が野良着に取り入れられていく。豊科飯田では、大正10年頃にはシャツに^{はらが}腹掛け、広袖のシリキレバンテンを着て田仕事をした。昭和初めから10年ころにかけて、穂高有明新屋、豊科細萱、堀金上堀・田多井でも野良着にシャツを着た。

女性の野良着

女性は、昭和20年頃まで上衣に長着を着た人もいる。ユキバカマなどの下衣の着用も男性より時期は遅い。堀金田多井では、大正初め頃まで長着に腰巻であったし、明科竹ノ花では、大正末頃に元禄袖のふだん着にタスキを掛けて野良着とした。一方、豊科成相では写真2のように明治40年にはユキバカマをはいて田植えをするなど、早くからツーピースの野良着になっているところもあった。

地域や人によって時期は異なるが、大正時代には、女性はユキバカマとかっぱう着を着用するようになる。ユキバカマは、長着の裾を入れてはくことができたので、足さばきが自由になり、動きやすくなった。ユキバカマをはくことで裾の短い短着も着られるようになったこと、それまで腰巻だけで裾を気にしながらしていた作業も苦にならなくなったことなど、長着の野良着に比べて機能性は格段に向上した。また、かっぱう着は、袂を袖に入れられるので、たすきと前掛けを兼ねられて便利だった。



図3 昭和初めころの女性の野良着（一例）
手ぬぐい・長着・かっぱう着・ユキバカマ・手甲・地下足袋

男女で異なる洋装化の時期

男性は、大正時代から、シャツを野良着として着るようになるが、シャツの上にはハッピを着たり、腹掛けをしたり、寒いときはソデナシを着るなど、洋装と和装が混在していた。ズボンが野良着として着用されるようになると、その後は素材やデザインなど、時代に応じて変わっていくものの、現在まで大きく変化はしない。

女性は、太平洋戦争中に考案された標準服と呼ぶ二

部式のウワッパリとモンペを、戦後、野良着として着るようになる。ウワッパリとモンペは一枚の着物から作ることができた。野良着にブラウスを着るのは戦後になってから。昭和40年代末から50年代はじめころになって、洋服の野良着を購入するようになる。年齢によっては、ユキバカマやモンペを着用し続ける人もいたし、早々と洋服の野良着になった人もいる。

男女で洋装への変化の速度や時期が異なる理由としては、ひとつには、明治6年(1873)に施行された徴兵令によって徴兵された男性が、軍隊で洋服を着た経験を郷里に持ち帰ったということがある。しかし、軍隊に限らず、外へ出て会社勤めをする男性が洋装化を迫られたこと、そうした社会進出の機会は、女性の方が限定的で遅かったということも、女性の洋装化の時期が遅れた一因と考えられる。

男女に限らず、実際にはモンペやソデナシなど、着慣れた野良着をずっと着つづける人もおり、同じ時代でも、年齢や個人、経済的条件などによって何を野良着として着たかは異なる。その変化はゆるやかで、一概にいつ頃までに洋服に変わったとは言い難く、現在のように誰もが洋服の野良着を着るようになるまでには、長い時間がかかった。



写真3 大正時代末頃か ワサビ畑の造成 明科御宝田(部分)
『目で見える明科史』(1977 目で見える明科史発行委員会)より
男性はシャツにハッピ姿が多く、洋装も見られる。



写真4 昭和20年の田植え 明科押野(部分) 『目で見える明科史』より
地域や共同体などで作業する際は、横並びに揃えた野良着を着ることも多かった。

便利だったユキバカマ

下体にはいた野良着は、大まかには、モモヒキ型のものと山袴型のものに分けられる。モモヒキ型ひものものは、腰紐が前に一本のものが主で、安曇野ではモモヒキ・ハンモモヒキ・ネキマタ・ネキマタギなどと呼び、尻にぴったりと付くかたちで、腰回りがゆったりした山袴のように長着の裾を入れることができない。

山袴型ひものものはカルサン・ユキバカマ・モンペなどがある。呼び名については、図4のとおり、長野県内だけでもさまざまな呼び名がある。野良着全般で言えることだが、同じかたちのものを違う呼び名で呼んだり、違うかたちのものを同じ呼び名で呼ぶなど、地域や時代、或いは人によっても異なるので呼び名だけで、どんなかたちのものか判断するのは難しい。

安曇野はカルサンとユキバカマと呼ぶ山袴をはいた。カルサンもユキバカマも長着の裾を入れられる。カルサンは木曾地方から伝わったとされるもので、四角型のマチが裾まで達している。裾巾がひろくゆったり作られている。裾口も広くとられていることがあり、山仕事によくはいたという。ユキバカマは畑仕事にはくことが多く、安曇野では男性も女性もよく着用した。ユキバカマは前後に三角マチがあり、後ろの大きな三角マチの角度の狭いところが膝下から裾に至るので、膝下の裾巾が狭く、足にぴったりつくようになる。膝下がもたつかず、動きやすいユキバカマは、野良着でもあったが、共同体での作業や、近所の葬式の時の手伝いなどにも着用した。隣近所へ手伝いに出る時などは、野良仕事用と区別し、新しいものや絹物などを着用した。後に、直線のマチからズボンのように曲線のマチをとったモンペとユキバカマの間のようなものも登場する。ユキバカマは、平成初め頃まで、雪や雨などの際に着物の裾を汚さないようにはいた、という人もいた。便利なユキバカマは長い間好んで着用された。

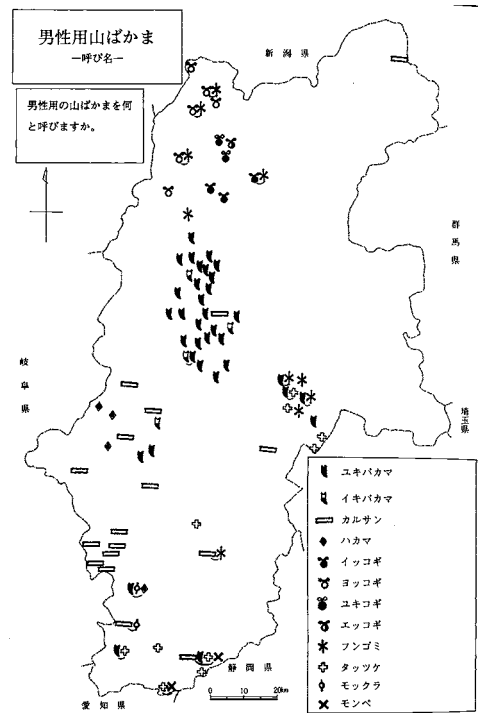


図4 山袴の呼び名『長野県史 民俗編第五巻 総説 I 概説』(1991長野県)より

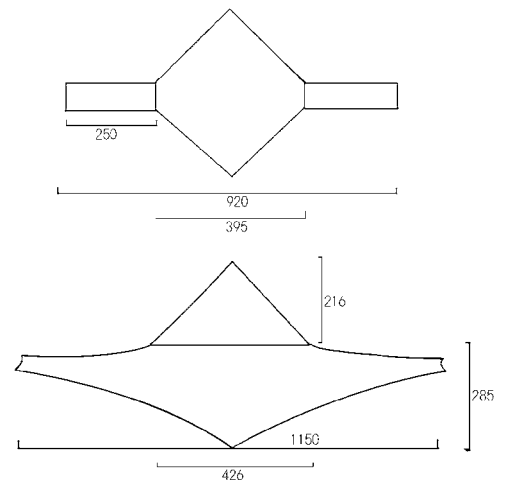


図5 カルサン(上)とユキバカマ(下)のマチ



写真5 草刈支度の女たち カルサンをはいた姿 昭和32年
撮影者：向山雅重 撮影場所：木曾郡木曾町開田
(伊那市立伊那図書館 所蔵)



写真6 豊科成相の田植え 昭和40年代 一番手前の女性はモンペ、2、3番目の女性はユキバカマ、その奥の男性はハッピーを着用(当館蔵)

3 着物の野良着 知恵と工夫

古い野良着を観察すると、一点一点違うことがよく分かる。野良着は家の女衆が作ったので、家族一人一人の体形に合わせて作られていたことがみてとれる。丈の短いユキバカマなら小柄な女性用だろうか。木綿か麻か。麻であれば夏にはいたのだろうか、それとも雪の中だろうか。木綿なら紺木綿かすりしまか紺か縞か。ユキバカマには紺木綿が使われることが多いが、博物館収蔵の資料の中には、「客用」とされた絹のユキバカマもある。冬の農閑期に行う結婚式で雪や雨が降った際、招かれた客に提供したことも考えられる。茶色と濃紺の縞のカルサンは、家織りの縞に思える。染めや織については、今後の課題でもある。

袖のかたち

着物の袖は袂のかたちによって、晴れ着かふだん着かがわかる。野良着の場合は袂がないか小さい。女性の場合、元禄袖のふだん着（長着）を野良着にもした。元禄袖は、袂に丸みがあり袖丈も短いので、動きやすい。ツツソデは袂がなく、身頃から袖口にむかって斜めになっている。船底袖はツツソデにやや丸みをもたせたもの、ネジリソデは後ろ袖の一部を前袖下に三角に折り上げたもので、元禄袖以外は袖下が布の織り目に対して斜め＝バイアス状になる。袖下をバイアス状にすることで、腕を上げたり伸ばしたりしても袖下が伸びて、動きやすくなっている。

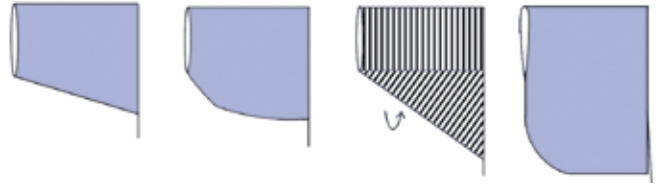


図6 左から ツツソデ（ツツポ・ツツッポ）・船底袖・ネジリソデ・元禄袖

無駄なく裁つ

右の図は、並幅（着物幅36cmほど）の反物を短着やユキバカマなどの野良着にする裁ち方である。長着を作るにはおよそ一反（11.4mほど）が必要だが、短着なら5.26m、ユキバカマは4.1mほどなので、着物一着分で両方を作ることができる。曲線で裁つ洋服と違い、直線で裁つので布が余らず無駄がない。

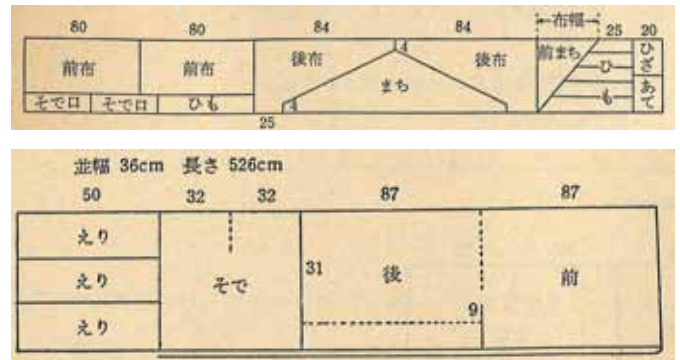


図7 『和裁 改訂版』（1983信濃教育会発行）より

洗い張りとは縫い直し



写真7 張り板で洗い張り

田畑での野良仕事は汗をかいたり泥まみれになったりするので、野良着も当然汗や泥で汚れる。汚れがひどいと川や井戸で水洗いして汚れを落としたが、衿えりやひざがすり切れてきたりすると、いったん野良着をほどいて洗い、のりをして張り板に張ったり、ほどいてバラバラになった布をはいで（縫って）1枚の反物にし、伸子針で洗い張りする。洗い張りした布をふたたび縫い直して着た。手のはやい（裁縫上手な）人なら、朝ほどいて洗った野良着を、翌日には縫い直して着ていたという。かつて、嫁入りの条件として、裁縫が上手なことが挙げられていたのは、こうしたことも暮らしに必要だったからだろう。また、一番汚れやすい衿には、半衿をつけておき、汚れたらそこだけ外して洗うこともした。

丈夫で長持ちさせるために

野良着には破れにくくする工夫もあった。野良仕事で思い切り動いたりすると、脇あきの縫い止まりなど、どうしても力がかかって裂けやすいところがある。そうしたところへは力布をして破れにくくした。膝や尻は力がかかるし、擦れて破れやすいので、裏からもう一枚布をあてて二重にした。また、破れたところの



写真8 ユキバカマの脇あきにつけられた力布



写真9 穴の繕い

繕いには模様や柄を合わせるなど、野良着であっても手間を惜しまなかった。

便利に心地よく着るために

男女ともによくはいたユキバカマは、前紐と後ろ紐では布が違うこともある。女性は、後ろ紐だけをほどいて小用を足したので、前紐と後ろ紐の布を変えることで、どちらの紐をほどけばよいか一目でわかるようになっている。

また、麻の野良着は、風通しもよく汗をかいても肌に張りつかないので夏の野良着にはちょうど良い。しかし、常に肌にあたる部分には、肌触りの良い木綿を用いることもあった。



写真10 ヨッコギ（麻製）股に当たる部分（前マチ）と裾口は、木綿で作られている（小谷村教育委員会蔵）

女性の場合、結婚前の娘や新婚の嫁は、紺紺でも大きな紺模様のを着たり、たすきや手差しなどにほんの少し赤色を使ったりした。年を重ねると、小さな紺模様や地味な色合いの野良着を着るなど、布の使い方にも工夫や区別があった。

ぼろになっても利用する

着られなくなったような着物でも利用方法があった。ぼろ織である。男性は、三尺帯を締めることが多かったが、女性はぼろ織の半幅帯をしめた。経糸（たていと）に太い木綿糸を使い、緯糸（よこいと）にはボロになった着物などを裂いたものを用いて、ぼろ織の帯を織った。経糸の配色で縞にしたり、緯糸になる裂いた古布の配色をあれこれ考えたりして、それぞれが工夫して自分で織った。現在の裂き織である。



写真11 ぼろ織の帯（当館蔵）

4 オーダーメイドからレディメイドへ

交錯する着物と洋服

明治維新の時と同様、太平洋戦争が終結したからといって、すぐに野良着に変化があったわけではない。

昭和20年代半ばから30年代の野良着について、聞き取り調査を交えて見ていくこととする。

昭和24年（1948）に穂高から明科に嫁いだSさんは、若いころから着物はあまり着ず、見様見真似の洋裁で自分の服はほとんど自分で作った。野良着には祖父母の古い木綿の縞の着物をこわして、ウワッパリとモンペを作った。モンペは、腰ひも付きのものとゴムのあるものがあり、ゴムの方をたくさん作った。ウワッパリの下にはブラウスを着た。その後、委託を受けて野菜の種取を行った。種取の時の野良着は、ブラウス・手さし、日除けのある帽子・地下足袋・モンペだった。

昭和28年、穂高に嫁いだHさんは、養蚕の桑摘みなどにはシャツの上にくず繭を紡いで編んだセーター、その上にウワッパリを着た。暑い時は、シャツの上に直接ウワッパリを着た。下衣はモンペで、寒い時には男女兼用の木綿のモモヒキをはいた。羊を飼っていて羊毛の取れる家では、羊毛のズボン下をはいたが、Hさんの家では羊を飼っていなかったので羊毛のズボン下は手に入らず、うらやましかったという。手甲もした。手甲は中指をはめる糸がついていて、手首は紐で縛り、肘のところはゴムを入れた。着物を着て、袂が邪魔になる時は手甲のなかに袂を入れた。頭は手ぬぐいを姉さんかぶりにしたり、日に焼けないように頬かむり。陽が差す時はその上に菅笠をかぶった。足元は地下足袋をはいた人もいたが、Hさんは慣れないので普通の足袋と生ゴムの長靴をはいた。一緒に働いた姑も同じ格好をしていた。

豊科のわさび農家のMさんに、昭和30年代にわさび畑で働いた男性の野良着について聞いた。冬はシャツの上に衿のツツポのウワッパリ、夏は裸に腹掛け、手甲はいつもつけていたという。ウワッパリの丈は腰と膝の間くらいまでで、襟には黒い半襟がかかっていた。土を運んだりすることもあり前掛けをすることが多かった。一年をとおしてモモヒキをはき、わさび畑に入る時は、素足に足半あしなかをはいた。日差しの強い夏は、麦わら帽子・カンカン帽・菅笠などをかぶっていた。



写真12 戦後まもない頃 繊維の原料となる大麻を栽培した明科上押野中部農家組合 『目で見る明科史』より
男性はシャツにズボン姿。女は手ぬぐい・かっぽう着・ユキバカマ。

また、前述のSさんの夫は、野良着には着古したワイシャツ・購入した作業用の木綿ズボン・手ぬぐいを頬かむりした上につばのついた帽子をかぶったという。

昭和20～30年代の女性の野良着は、ブラウスを着てウワッパリとモンペを野良着にしたという人は多い。ウワッパリはかっぽう着と同様、袖が広く、着物の上にも着ることができて重宝された。対して男性は、それほど変化がなかった。



写真13 女性用のウワッパリ（穂高）

既製品の野良着へ

戦後も女性ならブラウスにウワッパリとモンペ、男性もツツポの短着にシャツなど、和装と洋装の折衷のような野良着を着ていたが、ふだん着に着物を着る人が少なくなると、野良着も洋装化が進む。男性は戦前から洋服の野良着も着る人が多かったのでそう大きくは変わらないが、女性の野良着もようやく洋装化していく。洋装化にともない、ユキバカマやモンペなど、それまで自分で手作りしていた野良着を購入するようになってくる。かっぱう着風のしゃれたエプロンや、モンペ、首まで日除けのついた帽子など、機能性を持った野良着が販売され、手作りの野良着、購入した野良着、古着の野良着を組み合わせながら、思い思いの野良着を着るようになる。古着の野良着では、子どもが学校などで体操着として着たジャージを、野良着に転用する人もいた。ジャージは柔らかく、伸縮性も高いので動きやすい。通気性も良いうえ、子どもが学校を卒業してしまえば、着ることもなくなる。まだ着られるのに勿体ないと、野良着にするにはちょうど良いものだった。ジャージなどのスポーツウエアを野良着に転用している人は現在でもよく見られる。



写真14 ジャージの野良着 昭和50年代 安曇野市（当館蔵）

組合などで開く野良着用衣料の販売会や注文で購入したという人も多い。田植え長靴など、水田専用の機能性の高い長靴などは、今でも組合で買うという人もいる。

平成時代に入るところから安曇野にもホームセンターが開店し、さまざまな農作業用品を販売するようになる。現在では、作業着専門のコーナーも設置されるようになり、野良着をホームセンターで購入するという人が増えた。また、近年、作業着専門店が登場し、作業内容、天候、季節、男女に応じた機能性をもった野良着を気軽に購入できるようになってきた。

5 野良着は今

スタンダード野良着

はじめに述べた通り、安曇野ではかつてにくらべ、農業を生業にする家は減った。長野県の統計（表1）によれば、安曇野で農業を営む家は、昭和55年（1980）では、稲作農家だけで8,313軒だが、令和2年（2020）には、全農家数でも昭和55年の稲作農家のおよそ半分に減っている。しかし、統計には現れないものの、せんぜ畑で野菜や果樹、花きづくりを楽しんでいる人は多い。

Kさんは、穂高有明で知人から借りたせんぜ畑を営んでいる。畑では、大根・ニンジン・白菜・キャベツ・野沢菜・玉ねぎ・ネギ・ニンニク・ほうれん草・カブなどを作っている。

Kさんの野良着は、木綿のシャツにジーンズ、風除けにヤッケを着て手差しをし、泥除けにオーバーズボン、日除けと風除けを兼ねた帽子。

表1

単位：戸

年	総農家数	販売農家数	自給的農家数
1980年（稲作のみ）	8,313	7,381	932
2020年	4,553	2,479	2,074

※県統計による

※2020年は総農家数。1980年は明科町、豊科町、穂高町、堀金村、三郷村を合算した稲作農家数（このうち自給的農家は、総農家数から販売農家数を引いた数）

※自給的農家とは、経営耕地面積が30a未満かつ年間における農産物販売金額が50万円未満の農家

マスクはコロナ以前から埃除けとして野良仕事の際は必ずしていた。手指の保護には手袋をつける。手袋は掌部分がゴム、手の甲は通気性のよいメッシュになっていて蒸れにくく、^{くわ} 鋤などもしっかり握れる。足元は長靴で固める。シャツ・ジーンズは、少し古くなったふだん着を、ヤッケは登山用を野良着におろした。その他はホームセンターや作業着専門店などで野良仕事用に購入した。暑い時期の野良仕事では、ヤッケやオーバーズボン^{ほりよ}は着用せず、木綿のシャツとズボンで行う。Kさんの夫もほぼ同じような野良着だという。



写真15 Kさんの野良着

Kさんの格好は、安曇野ではよく見られる野良着姿だ。多少の差異はあってもごく一般的な野良着スタイルといえる。なんの変哲もないように見えるが、それぞれに機能性が備わり、快適に作業できる野良着である。

多様化する機能

栽培する作物や作業内容によって、野良着に求める機能も変わる。野良着は、機能性の向上とともに機能の多様化もしてきた。ここでは、いくつかの農作物や作業ごとにそれぞれの野良着をみていく。

◎大麦の収穫



写真16 Yさんの野良着

大麦を収穫する際に注意が必要なのは、穂先のノギである。ノギは鋸のような細かいとげがついていて、コンバインで刈り取ると細かくなって飛び散る。ノギが肌に触れると痛みやかゆみを引き起こす。そのため、大麦収穫時の野良着には、ノギが衣類の隙間から入り込まないように手袋の上から手差しをし、長ぐつは口を縛ってその上から足用のサックをする。目や鼻、口にもノギが入らないようにサングラスとマスクは必須。コロナ禍以前は、マスクをするとサングラスが曇るので困っていたが、コロナ禍以後、農作業用のマスクがバラエティに富み、機能性も向上して助かったという。また、野良着にはノギが引っ掛からない素材を選ぶ。

収穫は家族で連携して行う。連絡を取りながらの作業になるため携帯電話は必需品だ。コンバインで収穫した大麦をトラックで乾燥所まで運ぶYさんは、汚れ防止と携帯電話を入れるためにエプロン^{ほりよ}をかける。ノギが入らないよう工夫すると日焼けも防止できる。最近子どもたちに誘われ、作業着専門店に行くこともあるという。Yさんの息子はコンバインを担当する。野良着の購入は作業着専門店が多く、ホームセンターやファストファッションのチェーン店も利用する。作業着専門店のも



写真17 Yさんの息子

のは、デザイン性が高いものもあり、子どもと遊ぶ時などのふだん着にすることもある。とはいえ、作業着をえらぶ基準はデザイン性よりポケットの多いもの。スマートフォンを入れる胸ポケットは、埃が入らず、落ちないようにボタンなどがついたものがよく、工具を入れる大きめのポケットや、筆記具を入れる袖のポケットも必要であるという。農業用機械の手入れをする時は、機械に巻き込まれないよう体にぴったりしたズボンをはくようにしている。以前はつなぎを着ていたが、肩にすべての重さがかかって重いのと脱ぎ着が面倒なので、やはり上下の服の方がいいという。

◎ぶどう栽培



写真18 収穫したぶどうを入れるカゴのもち方にも工夫がある

する。エプロンにはポケットがついていて、そこにはハンカチやポータブルラジオを入れ、ラジオを聞きながら作業をする。

巨峰・シャインマスカットなどのブドウを栽培するFさんは、野良着は農協の即売会などで購入するという。肌触りのよい木綿シャツとズボンは欠かせない。ブドウ栽培は、上を向くことが多いこと、陽ざしが強いこともあり、日焼け対策には気を配る。日除け付きの帽子、手差し、手袋（素材はなんでもよい）、マスクをつける。こまごましたものは、ホームセンターや作業着専門店などで購入する。春先はブドウの木の皮を金属ブラシで使って剥く作業がある。かなり埃がでるので、マスクと花粉除けに使うメガネをかけて作業をする。また、収穫したブドウを入れるかごを前に持つため、必ずエプロンを

◎イチゴ農園

15人の女性が携わる三郷のイチゴ農園では、ビニールハウス内で夏秋イチゴ^{かしゅう}を栽培している。収穫時期は5月末から11月まで。ハウス内は、陽ざしが強く、日焼けと暑さ対策のため、例えば、ひざ丈のズボンの際はハイソックスをはき、半袖シャツなら、手袋で袖口から手先まで覆うなどする。基本的に肌を露出しない。昔は木綿のシャツを着ていたが日焼けを防止できないので、上衣はUVカット機能があり、吸水・速乾性の素材のものを、ファストファッションのチェーン店やインターネットなどで購入して着るようになった。セールなどで良いものがあれば、アウトドア用品専門店でも購入する。ズボンは古着が多い。携帯電話などを入れるためにウエストポーチをしたり、白内障予防にサングラスをする人もいる。顔の日焼け防止も兼ねてマスクをする。マスクは、息のしやすいスポーツ用のマスクをし、首には冷感タオルを巻く。衛生上、髪をビニールキャップで覆う。その上につばの広い、後ろまで覆いのあるような農作業用の帽子をかぶる。足元はビニールハウス内専用のサンダルを履く。苗の手入れをするときは、綿の白手袋に使い捨てのゴム手袋をする。



写真19 イチゴの収穫

冬の中に行う植え付けや土かえの際は、汚れてもよいような子どもの着古したジャンパーなどを着用して長靴をはく。土埃がひどいので、この時は不織布のマスクをする。

野良着からNORAGIへ

現在、野良着や仕事着への関心が高まっている。作業着専門店やホームセンターの作業着ブランド登場、それらの利用度の高さはそのあらわれでもある。作業の快適さを求めて、大手ファストファッションチェーン店で販売される高機能のインナーなどを利用する人も多い。また、インターネットで「野良着」と検索するだけで、さまざまな作業着の通販サイトが現れる。

これまでは、動きやすさや寒暖に対処できるような機能性も求められはしたが、そもそも野良着は汚れることが前提であるため、手に入りやすい＝安価なものや古着などが野良着として着用されてきた。そのうえで、快適な野良仕事のために、知恵を絞り工夫を重ねてきた。そうした工夫の中で、野良着の機能性が高まってきたのはここまで見てきた通りであるが、近年は、さらなる機能性を追求した作業着が登場している。例えば、繊維に虫を忌避する機能があるものや透湿性と防滴性を併せ持つもの、冷却用のファンや温熱ヒーターを内蔵した上着や帽子なども人気だ。前述のイチゴ農園でも、ビニールハウス内での作業に空調ファンのついた上着を用いる人もいる。

野良着にデザイン性を求める人も増えている。野良着の通販サイトでは、上記のような機能性も備えつつ、野良着をファッションとして捉え、デザインや、作業内容ごとのコーディネートを楽しもうとする動きもある。そうしたサイトで野良着を注文しているという人も多かった。本来、重労働でもある野良仕事を、少しでも楽しいものにしようというあらわれか、或いは野良仕事自体を楽しみたいという人、都市部から地方へ移住したり、或いは地方での暮らしにあこがれを持つ人が増えているのかもしれない。

野良着がこれからどう変化するのか、注目していきたい。

(宮本 尚子)



写真20 空調ファンのついたベスト



写真21 女性をターゲットにした野良着の通販サイト
男性の作業着通販サイトや、古着の野良着をアンティークとして高値で扱うサイトもある

インターネット閲覧サイト (2023.2.10閲覧)

<https://noragiya.com/>

<https://www.hatakenoie.com/>

「ふるさと安曇野 きのう きょう あした No.27」

編集 安曇野市豊科郷土博物館

発行日 令和5年3月18日

安曇野市豊科郷土博物館 〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8

TEL：0263-72-5672 / FAX：0263-72-7772

URL： <https://www.city.azumino.nagano.jp/site/museum/>